

## 平成28年度 小樽市学校体育研究会活動報告

H29.4.22

## 1. 研究活動の概要

- (1) 研究主題 「心豊かに学び、達成感を感じる体育活動の創造」
- (2) 研究の柱 ①一人一人が課題を明確にして、課題解決に取り組む体育学習の在り方  
②種目の達成感を感じさせるための授業づくりの研究  
③体力の向上を図る体育授業の在り方
- (3) 研究の内容 ①研究授業の実施 <授業研究の視点>

a 基礎基本の定着	b 体力の向上	c 運動に親しむ態度	d 言語活動の充実
e 小中の連携	f 課題設定方法の工夫 (全体の課題 個々の課題)		
g 課題解決のための思考・判断や具体的な内容の見取り方、子どもへのフィードバック方法等			

- ②小中学校の系統性を踏まえた学習内容の在り方  
③北海道学校体育研究大会への参加と還流

## (4) 研究の経過

6月	・小樽市学校体育研究会総会
10月	・第53回北海道学校体育研究大会札幌大会 6名参加 ・小樽市学校体育研究会 公開研究授業① (朝里中)
11月	・小樽市学校体育研究会 公開研究授業② (長橋中) ・小樽市学校体育研究会第1回定例会
12月	・小樽市学校体育研究会 公開研究授業③ (稲穂小)
3月	・今年度の研究のまとめ

## 2. 研究活動の成果

- (1) 研究授業は、小樽市教育研究会中学校体育部会の連携のもと中学校保健1本、体育1本、小学校1本の計3本実施することができた。題材については「自己形成」「サッカー」「小学校ゲーム」とすべて異なった題材で実施することができた。研究協議では活発な意見交流を行うことができ、「どの授業も授業規律がしっかり確立されており、教師の肯定的な声かけにより良い雰囲気の中で授業が進められていた。」「ICT機器を活用し授業の見通しを持たせるとともに課題把握や思考力を高める重要な手立を取っていた。」などの成果があげられた。

また、北海道学校体育研究連盟の広報担当者2名が小樽支部の活動状況について視察に来られ、中学校研究協議にも参加した。そして、連盟の取組状況や研究の視点から情報提供をいただき大変参考となった。次年度も研究担当者を招聘して実施する。

- (2) 今年度は小学校での研究授業の実施が実現し、これまで重要課題としてきた「小中の連携」(授業視点e)について取り組むことができた。研究協議の中では「中学校で走力・投力を伸ばすことが難しいので小学校で身に付けさせてほしい。」「6年間通して言語活動・思考の場面が設定できたら中学校でもやりやすい。」「学習カードは中学校でもよく使うので、今回のように小学校で訓練されているとやりやすい。」「中学校でも小学校のような丁寧な準備が必要である。」など、9年間の系統性を持った指導の必要性が再確認されるとともに指導方法等を交流することができた。
- (3) 北海道学校体育研究大会札幌大会に会長をはじめ6名の先生方が参加して研修を深めるとともに、定例会において研修報告を行い、還流することができた。

## 3. 研究内容や推進にかかわる課題と次年度への展望

- (1) 来年度も、小樽市教育研究会との連携を深めて小学校1本、中学校2本の計3本の研究授業を実施したい。体力向上の視点で校長会の協力を得ながら研究協議への参加者を多く募り、活動を充実させていきたい。
- (2) 今年度は小学校での研究授業を実施できたが、時期的に遅かったこともあり小学校教員の参加者は少なかった。「小中の連携」は重要な課題であり、今後もさらに小学校からの参加を募り、研究協議や情報交流を深め、小樽の子どもたちの体力、運動能力の向上を図っていきたい。
- (3) 北海道学校体育研究大会は、若年教師の授業力の向上と全国的・全道的な学校体育研究の状況や今日的課題等を把握していくためにも重要な研修の機会である。今回は6名の派遣ができたものの全員が同会場への参加となった。来年度は多くの先生方を割振りしながら派遣し、全体での還流の充実を図りたい。

<研究授業Ⅰ>	10月27日(木)	橋本卓也教諭(朝里中)	1年	保健『心身の発達と心の健康 - 自己形成』
<研究授業Ⅱ>	11月24日(木)	山中貴司教諭(長橋中)	1年	ゴール型『サッカー』
<研究授業Ⅲ>	12月5日(月)	野口貴史教諭(稲穂小)	2年	『ゲーム』鬼遊び「宝運び鬼」

**<研究授業Ⅰ>** 授業者の学級経営にも生かしたいという思いから、題材を深く掘り下げて、自己有用感・自尊感情の醸成といった道徳教育と関連付けた授業を展開しました。提示される課題に沿ってワークシート(学習カード)に個人の考えを記入し、グループの話し合いで相手の長所を述べていく展開でした。自立の欲求に目覚める思春期の生徒たちにとって、相手から認めてくれる嬉しさが伝わり、ほっこりした雰囲気の中で授業もスムーズに流れました。全体に発表する場面では教師も共感的な姿勢で生徒一人一人を認め、自己有用感の高まる授業でした。また、目標やまとめなどの板書事項をフラッシュカードやプロジェクターで提示するなど、時短化の工夫も優れていました。



生徒指導の3機能をフルに活用して展開した授業であり、正に「心豊かに学ぶ活動(主題)」に一貫していた授業だったと思います。今後、①指導と評価が一体化、②「見通し」と「振り返り」部分の具体化、③課題解決に向けて生徒が主体的・能動的に活動(アクティブラーニング)する授業展開などの課題ありましたが、次期学習指導要領を捉えた授業展開の可能性を持った授業だったと思います。

**<研究授業Ⅱ>** ボール運動のゴール型では“シュート”が生徒にとって最も好む技術ではあるが、サッカーは得点がなかなか難しいという特殊性に視点を当て、シュートにつながる「オフザボール」の動きを身につけるといった課題を設定しました。VTRでゲームのシュート場面に解説を加えて課題を明確にするとともに授業者の師範でセカンドポストに走りこむ動きを見せていました。得点できるパターンとして誰もができるようにタスク練習に時間をかけたり、練習の成果がゲームで実践できるようにマンツーマンディフェンスという条件で行うなど達成感を味わわせることに主眼に置いた授業展開でした。アドバイスなどの声掛けによる意識化、プレイに対する称賛等による意欲化を図りながら、授業者の専門性(サッカー)を発揮した授業でした。



種目の特性を捉え、授業におけるゲームの攻防の質を上げるために、先ず、攻撃の戦術を指導してから守備の戦術を指導するといった単元構成は、正に「達成感を感じる体育活動」につながると思います。今後、指導計画における3年間の段階的な指導内容や目標と評価の関連などの研究が課題となりました。

**<研究授業Ⅲ>** ゴール型ゲームの攻防の動きにつながる基本動作を系統的に押さえた授業でした。フェイクやフットワークなど技術的なことではなく、「鬼に対してどの方向に動くか」「鬼を引き付けるには誰がどのように動くと見方がゴールにたどり着けるか」など状況を判断した動きをパターンとして選択させながらゲームに挑戦し、効果的な動きはどのパターンなのか、グループの言語活動を取り入れながらチームワークによる動きを高める深い学びの時間でした。ゲームに必要な思考・判断力をポイントとした授業でしたが、運動量も重点に置き、休み時間等に鬼遊びを積極的に取り入れては児童の実態に即してルールを工夫しながら進めてきたようです。低学年でしたが、体力や思考力もレベルが高い授業でした。その他、班長が整列の指示を出し、並び方・座り方などの学習規律が定着していたことや始まりのチャイムと同時に児童が自主的に準備体操を始めたり、指示がなくても用具の準備をするなど体育の時間の流れ(約束)が習慣化していて、とてもきばきとした動きで言語活動の充実が図れていたと思います。



特に、作戦(思考)の場面において、子どもたちがよく考えて発言していたのは全教科にわたり言語活動が進められている表れだと理解できましたが、何よりも、低学年であってもすでに平面図の人の動きを行動に移すことが可能だということが特筆できることです。

今後、「見てまねる」ことから始まる低学年にとって、積極的なICT活用、さらにはスロー再生で見せる工夫でイメージ化を図ること、発達段階や習得段階に応じた「場の工夫」、ルールの「簡易から難易へ」工夫することなどの研究が課題となりました。

**《小中連携の視点からの成果と課題》**

今後、右の取組が小学校と連携できることが体力の向上に効果的につながると考える。

- 体力(走力・投力)の基礎・基本技能の習得
- 学習カードによる振り返り(課題の明確化、思考の見取)
- 言語活動や思考の場面の設定で、対話的深い学びの促進

【課題】小中一貫した9年間の体力の積み上げを図るカリキュラムの構築(研究)が必要である。